

特集

書を持って、街へ出よう

猛暑の夏も過ぎ、「読書の秋」がやってきました。……と、ここまで書いたところで、なぜ「読書の秋」という言い回しが出来たのか気になってきた。調

べたら、このフレーズは中国の文人・韓愈の「燈火親しむべし」という言葉が由来となっているとある。秋になると涼しくなるので、灯りが馴染む

ようになる。昔は油やろうそくを燃やして照明にしていた。夏の読書は拷問だろうが、秋になり火の暖かさが肌になじむようになる。夜も長くなる

ので、ようやく書物に集中できる季節がやってきたということか。「秋の読書は夜、自宅でするもの」、なのだろうが、モチモチさがは青空の下、書物を持って街に出ることを提案した

い。好きな本を読むのにぴったりのお茶店を探したり、本をテーマに交流するイベントに参加したり。そこにいる人や店や空間が、今までと違って見えてくるだろう。そう、街は一冊の本なのだ。



街のカルスマ読書論

街で気になる会社やお店、イベント。一体どんな人がやっているんだろう。好きな本を切り口に「街のカルスマ」に迫りました。



「木を買わずに山を買え」 教育の要諦学ぶ

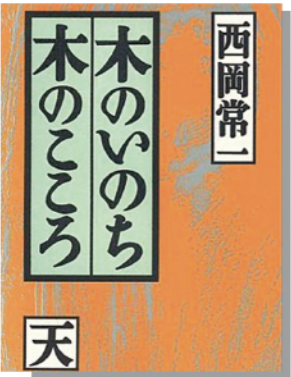
佐賀市文化会館の館長として「感動 文化都市・佐賀」の推進に情熱を燃やす大嶋公子さんが推薦してくれた本は法隆寺再建を手掛けた大工・西岡常一の著書「木のいのち木のころろ(天)」。大嶋さんは同書を読んで感銘を受け、たくさんの人に紹介してきた。「科学の力が及ばない技、体験したものが失われようとしている。今こそ、日本人は原点に戻る必要があるのではないか。そう感じさせられました。ことあるごとにこの本の言葉を思い出し、自分の指針としています」と語る。

著者の西岡氏は代々、法隆寺の改修に携わってきた宮大工の家に生まれた。法隆寺が1300年の長きに渡り華麗な姿を保ってきたのは、職人の技と知恵の継承だったと説く。その技と知恵を口伝として聞き書したのが本書だ。

大嶋さんは最近、2000年ぶりとなる修復を昨年終えた京都の本願寺御影堂を訪れた。約10年をかけ創建当時の偉容を取り戻した姿を見た時、感動とともに一つの懸念を感じたという。「2000年後にこの大きな屋根を支える木材が果たしてあるのだろうか。同じ時間を支えるだけの技術が日本に残っているのだろうか。2000年という、3世代に渡っての継承が前提となります。大工の技と知恵を活かす現場に限られている現状で先行きは暗いと感じました」。

そんな感慨を抱いたのは、あるエピソードが心に残っていたからだ。

「木のいのち木のころろ(天)」 西岡常一 著



「木のいのち木のころろ(天)」 西岡常一 著 168ページ 草思社 1993年

法隆寺を1300年守ってきたのは、職人の手から手へと引き継がれてきた技と知恵。それは決して言葉にできない手の記憶である。「最後の宮大工」西岡常一が木と人の育て方を語る。 ※新潮文庫に「木のいのち木のころろ-天・地・人」として西岡氏の弟子・小川三夫氏らの聞き書きと合わせて収録されている。

「最近、友人がボランテニアをしていて相談室に40歳くらいの大工さんが来て『本当に仕事がない。このままでは暮らせない』と嘆かれたそうです。その背景には現代日本が技術 佐賀市文化会館館長 大嶋公子さん

オオシマ・キヨ 佐賀市出身。佐賀市役所勤務を経て、平成10年から現職。佐賀市職員時代は女性の社会参画に向けた施策を積極的に展開。多岐興味で能の宝主兼教授。

木はその生育環境によって性質が異なってくる。山の南側の木は細いが強い、北側の木は太いけど柔らかい、陰で育った木は弱い。製材されてからこの性質を見抜くのは経験があっても難しい。木を伐採する前に山に入れば、おのずとどの木をどう使うか分かるという。またそれぞれの木の癖を建物に活かせば、耐久年数も長くなる。大嶋さんは「木の癖は、人の心ぐみという言葉がありますが、木の性質を見抜いて建物を建てることと、人間の個性を活かして社会をつくることは同じだと思います」。大嶋さんが佐賀市文化会館の館長に就任して以来、力を注いだのが、子ども感性を育む事業だ。芸術、文化分野の体験ワークショップを積極的企画してきた。今年には、雅楽、演劇、能楽などの体験教室を開催した。雅楽では、春日大社の南都楽所を招き、楽器解説や体験を行った。「参加者の中から雅楽や演劇、能楽を志す人が出てきてくれたらすごく嬉しいですが、それよりも、文化への興味、理解がある人を増やしていくことが大切だと思っています。技や知恵を守り育て継承していくためには、次世代の社会全体の感性を磨かなければいけません。今さら便利な生活を全部、捨てることはできませんが、文明と文化のバランスがとれた人材を育てることが必要だと思っています」。木を買わず山を買え。大嶋さんにとっての体験学習は、山を育てることなのだろう。

「本を読む暇があったら、お客様や取引先など人と話せ」。佐賀玉屋の創業時のトップで、大叔父（祖父の弟）に当たる田中丸善八（1894-1973）のこの言葉、父（77年から82年まで社長を務めた故・吉次郎氏）がよく話していました。「家訓」というほどではなかったんですけどね」と話すのは、昨年5月に佐賀玉屋社長に就任した田中丸雅夫氏。

田中丸善八は、その兄の二代目善蔵とともに江戸時代から続く田中丸商店を百貨店に変えた、田中丸家「中興の祖」のひとり。「田中丸コレクション」と呼ばれる500点に上る九州古陶磁を集めたことでも知られる。そんな偉大な大叔父の「本を読む」という強烈な言葉が幼い頃から刷り込まれ、これに反発したり、肯定したりの繰り返し。読書に対して微妙な距離感を持つようになったようだ、と笑う。

高校時代はこの言葉に反発して図書部に入り、フランス文学やロシア文学を読みふけた。その後は一転、純文学に重さを感じるようになり、遠藤周作の狐狸庵シリーズや、北杜夫の怪盗ジバコなど軽いユーモア小説にはまる。

「遠藤の『百い人』や『沈黙』、北の『夜と霧の隅で』『樞家の人びと』は素通り。推理ものでもつばら赤川次郎だった」。

学生時代は、3歳上の兄の影響でイアン・フレミングの『007』（早川文庫）を読むようになり、ジェームス・ボンドのかわつこよさにひたすらあこがれた。

「車ならアストンマーティン、時計はロレックスなど、ブランドの最初の好みはボンドに影響を受けましたね。SF、特に『紺碧の艦隊』などの架空戦記で知られる荒巻義雄も大好きな作家です」。

唐人町を中心に、ブランド衣料店を手がける石丸良弘さん。イチ押しの本は、終戦後、ヤミ米を拒絶して亡くなった白石町出身の山口良忠判事の半生を描いた「われ判事の職にあり」だ。

佐賀で育った石丸さんは、20歳を過ぎたころ、中学時代の教師にすすめられ、この本を手にとった。

「ヤミ米であっても、食べなければ死んでしまう。それが分かっていたいながら、最後まで信念を曲げなかった。そういう人生はすごいと思った。そのときの強烈な思いは今でも鮮明に覚えている。佐賀にこういう人がいたのか！と。最後まで信念を貫き、自分に厳しく、自分もそうありたいと思った」

当時は、建築関係の仕事に就いていたが、この本に出会ったのがひとつの転機となり、かねてより興味の深かったファッションの世界に飛び込んだ。

「この本を読んだころがターニングポイントだったと思う。自分も信念を曲げず仕事に打ち込んでやろうと決心した。自分が信念を貫けるのは何か、一番好きなことをやればいいと思って、ファッションに行き着いた」

山口判事の信念を貫く壮絶な半生は、ファッションビジネスの一线にいる今も、心に残っている。

「小学校2、3年生のころ、母からもらったお小遣いで、初めて自分で選んで買った服をいまだに覚えている。赤のハイカラーのストライプのシャツだった」。

「われ判事の職にあり」 山形道文 著



「われ判事の職にあり」 山形道文著 326ページ 文芸春秋 1982年

白石町出身の山口良忠判事の妻らに取材し、戦後、司法の職にあった山口判事の人間実像を描いた作品。山口判事は、戦後の食糧難の時代、当時の食糧管理法のつとめて、違法であるヤミ米を拒絶した。栄養失調の体を押し法廷に立ち続けたが東京地裁で倒れる。その後の療養もむなしく、亡くなってしまふ。職への誇りを最後まで失わず、命を賭して信念に殉じた。



イシマル・ヨシヒロ 1958年3月東京生まれ、佐賀市唐人町在住。アメリカの父と日本人の母とのハイーフ、幼少のころ母とともに佐賀に移住し、佐賀で育った。86年にファッション事業をスタートし、現在、ブランド衣料店を唐人町を中心に16店舗を構える。

株式会社 GATHER 社長 石丸良弘さん (52)

そのころの子供の服にしては本当にかっこよかったな」

石丸さんは小学生のころからすていにおしゃれに目覚め、中学高校と成長するにしたがって服にお金を使うようになった。

アイビーやロック調の服、70〜80年代に流行ったトラッド系、ロンドンで目撃したパンクファッション。そのころの給料1ヵ月分をはたいて買ったというビギのジャケット…。「20代になってからは、服を買うために働いていたようなものです」と柔和に笑う。

「本を読むより人と話せ」？ 信じる「おしゃれ感」貫く

経験や知識だけでは判断材料が不足することも多い。

手っ取り早くハウツウものに頼り、手当たり次第に読み散らしたが、当然ながらあまり役に立たなかった。たとえば最近「もの不足からもの余り」へと環境が激変する。こうなると、それまでのハウツウは全く役に立たない。というか下手に頼ったら判断を誤ってしまう、というわけだ。

「結局は本が一番だと思う。情報を仕入れるだけなら、テレビや新聞、雑誌、インターネットでもいいが、体系だつて理解するには本しかない。日々のニュースでは、初めて聞く言葉がしょっちゅう出てくる。その言葉の意味を理解するだけなら、インターネットで検索するなり、辞書を引けばいい。だが新しい知識を元に考え、想像し、これらを頭の中で整理しながら読んでいけるのは、やっぱり本につきる」。

現在、田中丸社長は営業本部長も兼務し、時間があれば店頭を巡回する「現場にいる社長」だ。顧客や従業員の声、すなわち「現場の声」に即座に反応できる。

その判断のベースになる知識や見識を高めておくためにも、新聞閲覧と読書が必要だと、最近とみに感じている、という。「大叔父の言葉通り、たくさんの人に会い、話をすることはとても大事なことです。だが新聞や読書から得た知識を自ら持つておくこと、それを常に新しくしておくことが、人と会う前提になる」。

「先日松下幸之助の『道をひらく』を久々に読み返しました。善八大叔父の「本を読むな」の話をしていた父ですが、生前松下さんや本田宗一郎さんの本だけは読むべきだとしきりに勧めてくれました。暇を見つつけ、少しずつ読んでいこうと思っています」。

記憶に残る服を、佐賀の街の人たちに提供したい。

一念発起した石丸さんは、同様にファッション好きだった妻とともに、1986年、1号店をオープンする。

93年に株式会社 GATHER を設立。独自の服を集め、石丸さんの信じる「おしゃれ感」に1本の芯が通っていたことで、業績は徐々に上がっていった。現在では、佐賀を中心に、福岡、長崎など16店舗を構えるまでに発展した。

ネットでのショッピングが隆盛となっている昨今だが、人が「集まる」ことにこだわった丁寧な経営を行い、GATHER でしか味わえない「おしゃれ感」を気に入っているファンは多い。

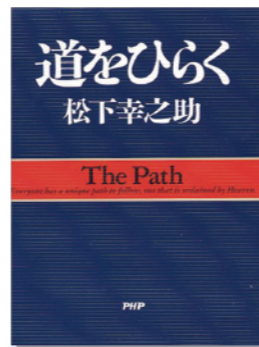
雰囲気ある店舗作りや仕入れにも妥協はない。東京に向いて多くのファッション雑誌に広告を出し、聞き込みを行うなど移り変わる流行を逃さないための情報収集の努力にも怠りはない。

業界や時代背景こそ違えど、ファッションへの情熱をとことん追求する姿勢は、山口判事の仕事に対する誇りと同じ。自らの天職に信念を貫く姿勢もよく似ている。

「自分のできることを、信念を持って。人が集まる」ことを意識して、唐人町の通りを活性化させたいと思っている。これからも挑戦です。仕事をやる以上は、信念をどこまでも曲げずにやりたいですよね」

われファッションの職にあり。自らの信じる「おしゃれ感」を貫き、佐賀の街を、ファッションで盛り上げていく。

「道をひらく」 松下 幸之助 著



「道をひらく」 松下幸之助 著 271ページ PHP 研究所 1968年

昭和43年の発行以来、累計400万部を超え、いまなお読み継がれる驚異のロングセラー。本書は、松下幸之助が自分の体験と人生に対する深い洞察をもとに綴った短編随想集である。事業の成功者であり、それ以上に人生の成功者である松下幸之助であればこそ、その言葉には千鈞の重みがある。あらゆる年代、職種の人に役立つ、永遠の座右の書。



タナカマル・マサオ 1951年、佐賀市生まれ、佐賀西高、福岡大経済学部を卒業後、76年に佐賀玉屋入社、営業部門、外務部門を経て、2004年から執行役員、今年3月から同営業課本部長。09年5月から現職。

田中丸雅夫さん (59)

ただ最近では忙しいのと、老眼がひどくなったことで、以前に比べると本どころか、活字そのものに接する時間かなり減った。

「今読んでるのは、せいぜい佐賀新聞くらい？ 本は本当に読まなくなりましたねえ」。

佐賀玉屋社長

とはいえ、社長になると常に判断決断の連続だ。大型スーパーが郊外に相次いで進出し、消費者志向が変化する中、売り上げ減少が続く。加えてリーマンショックに起因する世界不況もいすわったまま。創業200年を超す老舗百貨店の改革を託されたが、自らの

フリーペーパー月刊「WASAABI」を発売する株式会社スイッチの代表トップセールスマンとして、月50件以上のクライアントを担当している藤澤さんが「人とは何のために仕事をするのか。分かりますか」と書いてあります」と推すのは稲盛和夫氏の「生き方―人間として一番大切なこと」だ。

「謙虚で素直が一番だ」ということを学んだ。一生懸命、誠実、まじめ……こうしたシンプルな道徳律や倫理観をしっかりと守り、それを自分の生き方の根っこに据えて、これからの活かしたいと思っっています。京セラ、KDDIを世界的企業に育て上げた稲盛和夫氏の人生哲学が、藤澤さんの中に染み込んでいる。

藤澤さんは高校卒業後、JA佐賀市中央に就職。10年間務めた後、株式会社ユニコに転職。飲食店3軒の店長を務めた後、「スイッチ」に入り、お店の経営から雑誌の営業へ。「出版の仕事は初めてでしたが、現場を回ることは性に合っていました。JA時代に培った人脈と営業方法がすぐ役に立っています」5年前に代表取締役就任。猛烈な働きぶりは、JAに務めていた時代から、ずっと変わらず、今でも一日に15軒以上

佐賀 福岡両県に36店舗を展開する明治屋クリーニングの営業本部長として営業と人材育成に努める。大石貴明さんの生き方のものが、一冊の本のように面白い。

大石さんが家業に入ったのは23歳のとき。京都の同業会社での「修行」を終え佐賀に帰ってきた。それまでの見聞を活かして、より高い目標を掲げて仕事をしながら、壁に突き当たってしまう。「自信家だったし、思う通りにいかないと納得がいかない。仕事仲間に対しても、もっと出来るだろう」と要求が高かった」と当時を振り返る。

このままではいけない。入社3年目大石さんは徒歩で東京タワーまで行き、東京で生活しようと決めた。「人生観を磨く必要を感じたんです。自分を脱ぎ捨てて」。思いつきで始めた東京への徒歩旅。所持金は20万円くらい。肩パットもないリュックに普通のスニーカー。「荷物は着替えて自己啓発本や成功本など12冊くらい。読書はあんまり好きじゃなかったんですが、重い荷物をわざと背負うという意味合いが強かったですね」。

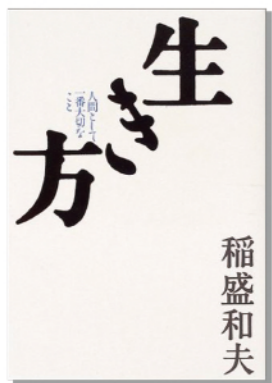
7月にスタートした。旅は過酷なものだった。北九州へ入る山の中で靴擦れがひどくなり、動けなくなった。足を引きずって山を下る。偶然にも山登りの専門店があり、ウォーキング専用の靴を購入。リュックも肩パットがあるものを選んだ。「この旅が甘いものでないと分かっていたいなかった」。

当初はビジネスホテルやスーパー銭湯などに宿泊していたが、山口県あたりから野宿も平気になった。「ファミレスで寝るのも抵抗があったのに、バス停やパチンコ店

日本踏破 同じ哲学感じる 佐賀を物心ともに豊かに

「生き方―人間として一番大切なこと」 稲盛和夫 著

「まっすぐな生き方」 木村 耕一 著



藤澤憲一さん(38)

のクライアントを回るといふ。経営者として参考になっているのが「ランチエスター経営」。「小規模1位主義」と「部分1位主義」を重視し、エリア、存在です。要旨を絞って戦略を練る株式会社スイッチ代表取締役

フジワ、ケイイチ 1972年、佐賀市生まれ。佐賀商業高校卒業後、JA佐賀市中央に入社。28歳で「らら」グループに転職。2005年より現職。

「生き方 人間として一番大切なこと」 稲盛和夫著 246ページ サンマーク出版 2004年

人間として正しい生き方を志し、ひたすら買きつづける。それが、いま私たちにもっとも求められている。混迷の時代に打ち込む、「生き方」という一本の杭。京セラとKDDIを創業した著者が語りつづ、人生哲学の集大成。

て、スタッフみんなまで力を合わせて仕事をしていきます」と語る。

「お客様第一主義」を、常日ごろ、スタッフに言い聞かせ、企業のトップとして人材育成にも力を注ぐ。「自分の都合よりも、お客様の都合を考えると常に言っています。相手の都合を考えて、お客様に合わせて「何とかする」のが仕事だと思わなくてはなりません」。

藤澤さんの「生き方」の根底にあるのは、稲盛和夫氏も説く、プラス思考。「マインナスに考えないということですね。よくよせず、プラスに考えていくということ。よくよしないためにも、後悔しないよう、全身全霊で仕事に取り組むことが大事だと思っています」。

チャレンジは続く。スタッフ育成とともに藤澤さんは「町づくり」も今後の課題として挙げる。「町中に人を集められるようなイベントを仕掛けていきたい。音楽は世界共通なので、ハウスパーティーなどの音楽のイベント。それにアーティストの誘致など、出来ることから少しずつ考えていきたい」と話す。

スタッフ、そして町への視座。藤澤氏の核には稲盛氏の「物心ともに豊かに」というメッセージがある。

の軒先でも平気になった。寝るといふのと振り返る。

国道トンネルを歩いていたら、大型トラックがリュックをかすめて通過した。いつの間にか高速道路を歩いていた。「何度も死にかけた」と笑う。そんな

明治屋クリーニング営業本部長 大石貴明さん(38)



オオイン、タカアキ 1972年、佐賀市生まれ。徳島高校卒業後、東京の学校を経て、京都でクリーニング会社に就職。1995年、明治屋クリーニングに入社。



「まっすぐな生き方」 木村 耕一 著 296ページ 1万年堂出版 2010年

今、時代はブレない生き方を求めている。正直に、まっすぐにひたむきに――。戦国武将や古今東西の有名人名の中から、爽快に生きた、胸のすくような43のエピソードを紹介。話題の坂本龍馬から、武田信玄、諸葛孔明、エジソンなど、多彩な人物の逸話が満載。努力は必ず報われる！43のエピソードを読み終えた時、時代にも、世相にも流されないシンプルな法則が発見できる。

な旅の中、記憶に残るのが聖書と松下幸之助氏の著書だ。「聖書はビジネスホテルから拝借して読みました。日頃、目を向けたいものを敢えて読んでみよう。西欧の考えの基本を学ぶことができました。松下さんの著作は、神奈川あたりの飲食店に置いてあって、このおじさんは自分と同じことを考えている、と感じ、店の人から譲ってもらいました。松下さんがナショナルの創業者とは全然知らなかった」。

約1200キロを踏破し東京タワーに到着したのは出発から2カ月後だった。弟の部屋に転がり込み、土木作業員をしながら生活。最後は徒歩旅行を聞きつけた会社から誘われ月収数百万円で日本全国を飛び回る日々を送った。東京生活も6年目、地元に残った同世代の社員からのラブコールを受け帰郷を決意。再び徒歩で北海道まで行き、飛行機で沖縄へ。船で鹿児島に渡り、佐賀まで歩いて帰った。途中、青森で凍死寸前になりながら、徒歩での日本一周を達成した。

大石さんが最近、感銘を受けた本として挙げるのが「まっすぐな生き方」。坂本龍馬やエジソンなど古今東西の有名人名のエピソードを収録している。大石さんは「世の中は因果応報で成り立っていて、良いことを行うと良い結果が得られる。それを王貞治さんらのエピソードから実証しています。悪い結果も全て自分が引き寄せたものと自覚することが大事」と解説する。日本踏破中、警察に保護されたときも、必ず保護された場所まで戻って歩き出した大石さん。「1センチ、1ミリも「ごまかさないう」その姿勢は、まさに「まっすぐな生き方」だ。